

## 江戸前の鯨

三浦 福助

2006年7月15日.

「江戸前の鯨とはなんだ！！魚と間違えているのではないか」とお思いでしょう。将軍様のお膝元の江戸湾で獲れる魚、アナゴにシャコにアオヤギ、アサリ、メゴチ、コハダ、スズキなど、これこそが「江戸前の魚」だ。イキが良くてうまい！。鯨のようなものは、おとといお出でと言われかねません。しかし、江戸の狂歌師、蜀山人に次の狂歌があります。

「いさなとる 安房の浜辺は 魚偏に京と言う字の都なるらん」  
江戸でも東京湾の捕鯨は結構知られていたものだったのです。

日本の捕鯨は、16世紀に南紀太地(和歌山県太地町)の和田仁左右衛門が集団漁法による捕鯨を始め、これが発祥とされています。江戸時代の初め、ここの捕鯨船が操業中に遭難、漂流し、安房勝山(千葉県鋸南町)に漂着するということがありました。そして、この漁民が勝山の漁民に技術を伝え、関東では初めて安房勝山で捕鯨が行われるようになりました。



勝山での本格的な捕鯨は、醍醐新兵衛定明(だいごしんべえさだあき)が、50隻以上の捕鯨船で「突組(つきぐみ)」と呼ばれる組織を構成して、始めました。新兵衛定明が組織する捕鯨は、旗頭や世話人、羽刺(はざし)、鯨をさばく出刃組、脂を取る釜前人足など、600人あまりが従事し、勝山港の沖にある浮島の北側で、東京湾に入って回遊してくるツチクジラを銚で突いて捕獲していました。

新兵衛定明は、寛永7年(1630年)勝山に生まれ、捕鯨を組織化すると共に、勝山の産業を起し、村を大いに繁栄させました。村が飢饉の年などには自

ら米蔵を開いて村民を救済するなど貢献をしました。宝永元年(1704)75歳で没し、勝山港から約300m、仁浜浦を一望できる大黒山(だいこくやま)中腹の岩盤の大きな窪みの中に墓があります。墓前には、いまなお、子孫や町民の献花は絶えません。



醍醐新兵衛の墓、蜀山人の歌碑

墓石の右側にある石碑には、蜀山人の狂歌が刻まれています。この歌は、文化2年(1805)蜀山人が勝山を訪れた際、醍醐家の繁栄をたたえて贈った歌だそうです。

勝山の捕鯨の元締としての醍醐家は、新兵衛定明以後12代にわたって勝山の捕鯨を指導し、代々「新兵衛」を名のりました。明治に至って、10代目の醍醐新兵衛徳太郎は、洋式捕鯨を取り入れ、沿岸での捕鯨から洋上捕鯨を試みましたが、勝山の捕鯨を再び盛んすることには出来ませんでした。幕末頃になるとアメリカの近代的な捕鯨が日本近海に来るようになり、アメリカの捕鯨船は、蒸気船であり、火薬でモリを打つ新式なもので、鯨が沿岸へ近づく前に沖合でほとんど捕獲されてしまい、沿岸へやってくる鯨を待つて捕獲するという日本の伝統的捕鯨法では話にならなかったのです。

近代的な洋上捕鯨は、その後、勝山ではなく館山を基地として開始されたのです。そして、白浜、千倉、和田と広がって、現在でも和田で近海捕鯨が行われています。さらに、江戸時代中期に安房の捕鯨船が三陸沖で難破し、牡鹿半島(宮城県)に漂着し、住民に近海捕鯨技術を伝え、それが牡鹿町鮎川の捕鯨の始まりとなったとされています。南紀太地から継承された技術が、同じような経緯で東北に広がったとは面白いことです。技術の継承といえば、本場の南紀太地では勝山に銚突き技術を伝えたのですが、その後、鯨を網に追い込んで採るさらに規模の大きな網取り漁法に転換していきました。しかし、海難、アメリカの捕鯨の進出などにより網取り漁法は衰退しました。網にかかった鯨が逸

走し、網船が沖に引き回され、遭難することがかなりあったようです。有名なのは、明治11年11月の大遭難で、三宅島にまで漂着し、100人以上の犠牲者が出たそうです。この遭難が直接の引き金となり、南紀太地の網取り捕鯨は瓦解してしまっただけです。

勝山で捕っていたのは、ツチクジラで、体長約11m、体重約10トンの歯鯨の仲間です。現在でも和田町で水揚げ処理されていますが、1頭、約600万円の値段だそうです。



ツチクジラ 模型

頭の形が、昔、藁などを叩くのに使った木槌に似ていることから、槌クジラと呼ばれたということですが、魚やイカなどを食べていて、背中への傷はイカとの格闘で付いたものだそうです。

勝山で、一番鯨が獲れた記録は、年間53頭だそうです。平均すると年に9頭くらいと云われており、勝山としては貴重な産業だったのでしょう。

勝山の竜島地区の山すそに狭い石段と小さな鳥居を具えた鯨塚があります。鯨塚は、山裾の岩肌をくりぬいて造られた新兵衛寄進と伝わる弁天様を祀る小さな祠（ほこら）を中心に、写真のような小さな石祠が所狭しと無数に並べられ、墓場のような雰囲気を感じさせる場所です。



鯨塚 全体と塚拡大

これは、昔、鯨が獲れた時、鯨漁のお礼と慰霊のため石祠を造り、塚に奉納したものだということですが、今は草が生い茂るに任せてあります。昭和53年に



この鯨塚の鳥居を改修したのだそうですが、その寄付者名簿を見ますと醍醐さん  
の名前があり、醍醐家は今もつながっていることが分かります。

また、鯨漁を偲ぶものとして、鯨漁の神社と鯨唄かあります。鯨漁にかかわ  
る神社は、勝山の沖合いに浮かぶ浮島にある浮島神社と勝山の仁浜にある加知  
山神社です。

訪問した日は、うねりが高く浮島への渡海は叶いませんでしたが、湾のすぐ  
前、本当に浮いているような島でした。加知山神社は町の中にあり、醍醐家の



浮島

可知山神社

墓所のある妙典寺の近くです。訪問した日は7月9日、この日は加知山神社の  
祭礼の日でしたが、ご覧のとおり神社は特に飾りなども無く、静かでした。実  
は、この日にはご神体は、浮島神社にお移りになっており、浮島神社で祭事が  
行われていたのです。そして、この日の夕刻にご神体は浮島からお戻りになり、  
こちらの神社に1年間お鎮まりになるのです。ご神体は船で港まで運ばれ、港  
からは行列を組んで神社にお入りになります。



港に着いたご神体。お籠に入っています。 神社に向かう行列

この行列のとき、道中で歌うのが、鯨唄です。

突いたかしよ 突いたかしよ  
ツチのこもつは突いたかしよ  
うれしめでたの若松さまよ

枝も栄える 葉も茂る  
 こんど突いたも内宿組よ  
 親もとるとる 子もとるよ  
 サア突いたかしよ 突いたかしよ

(注 ツチのこもつ とは、子持ちのツチクジラのことだそうです)

これが何時できたかは、はっきりとわかりませんが、江戸時代の末頃、鯨の豊漁を祈って始まったとされています。行列の後尾に歌い手が付いて、歌っていくものだそうです。この唄を聴きたいと思って行ったのですが、今年はこの唄は出ませんでした。この祭礼は、仁浜地区と内宿地区が年番となっていくので、今年は無し、木遣り唄で行列を進めていました。来年までおあづけです。行列が加知山神社に着くと、お払いがあり、歌い手の人たちの奉納踊りがありました。大漁節とソーラン節でした。



大漁節の奉納踊り 普段着のおばさんたち

鯨唄の歌詞から見ますと、内宿組を褒めていますから、確かに内宿のものかもしれません。更に推測しますと、突き組には大組、新組、岩井袋組の3組があったとの事ですが、岩井袋組は別として内宿を中心とする組と仁浜を中心とする組があったのかも知れません。新兵衛の墓などは仁浜にありますから、最初に仁浜の組が出来て、内宿の組は後かも知れないなどと妄想しましたが、如何なものでしょうか。

漁港の北に接して、大黒山があり、頂上に展望台があります。展望台までの登り道は、日頃の不摂生でなまっている身としては大変辛いものでしたが、その眺めは良いものでした。城の天守を模したような展望台が出来ていて、勝山城の説明板があり、勝山城と関係ありげでした。しかし、私見では、ここは鯨

見台だったのではないかと、思います。ツチクジラが来遊する春、夏には毎日ここに詰めて鯨を見張り、鯨を見つけると合図をして出漁したものだと思います。この山の中腹に新兵衛の墓があるのですが、醍醐家の菩提寺はここから300mも離れており、ここに特別に墓所を作ったのはこの縁ではないでしょうか。



勝山漁港に接する大黒山と展望台

ところで、これらの鯨はどのように利用されていたのでしょうか。鯨は獣ではないということで、煮物、汁物で食べるが多かったようです。保存のために切り身の干物にして「鯨のたれ」としても売っていました。現在も南房総の名物として広く親しまれています。古くは鯉より格の上の肉と評価されていたのだそうですが、一般に普及していたようです。油の利用もありますが、灯火用としては臭みがあり、菜種油などに座を譲ったようです。田んぼの虫除けに良いとの事で、農薬としての利用もあったそうです。鯨肉を食べると精がつき、麦刈りなどをして目にも禾が刺さり難いなどともいわれました。特殊な例ですが、江戸時代に香取郡で、ご禁制の日蓮宗不受不施派の弾圧があったときに、僧は島流し、その石碑は三日三晩鯨油で煮た後、砕いて埋めたという記録があります。色々な利用があったわけです。

勝山の鯨漁の漁場は、東京湾内だけでなく湾口部から相模湾に広がっていました。鯨漁を見聞きした他所の漁師も多く、話が伝わっています。その話によれば、何本かの銚子の深手に抵抗する力が尽きた鯨は、銚子傷から流れる鮮血が漂う中にガックリと頭を下げ、また立ち直ろうとして断末魔の頭を上げる、空には富士山がクッキリと浮かんでいる。そして、鯨は富士山を三度拝んで死ぬという話が言い伝えられています。まことに哀れな話です。富士山を拝んだところで、打ち止めとしましょう。  
(平成18年7月15日)